

堤上の街道(淀川左岸堤防を利用した古い京街道)の右側には天秤棒を担いだ人が荷物を運んでいるのがみえます。その後方の山は生駒山だと思われます。



■生駒山(平成21年11月14日 大阪工大より東方を撮影)

毛馬の左側の図の淀川には下りの三十石船があり、船頭一人が棹か艫で船を操っているのが描かれています。堤上には右の図の三十石船の曳柱[注3]の先端に縄をかけ引っ張っている五人の人がいます。三人は三十石船の水子(読み=かこ=水夫)で残りの二人は毛馬付近の流れの速い所の船曳専門の人夫だと思われます。

三十石船の描かれてる絵図を見ると大坂の町の橋のそばを通っている三十石船には帆柱が描かれていないので天満橋・川崎の渡しを過ぎると上り舟は帆柱を立てるのだと思います。

堤上で一人で船を引っ張っているのは右の図の奥の小さな船の水夫又は船曳専門の人夫だとおもわれます。

[注1]

三十石船は、元禄年間(1688~1703)、長さ56尺(約17m)、幅8.3尺(約2.5m)、乗客28人、水夫(加子=船子)4人。早草登人乗三十石船は、長さ15間(約27m)、幅2間余(約3.6m)。平成17年8月、旭区まちづくり連続講座「知って得する旭学」の淀川の歴史では、三十石船は長さが約30m、幅約6mくらい・・・時代によって大きさが違います。

[注2]

屋根は苦草き・・・苦とは、菅や茅などをこものように編み屋根をおおったもの。◎三十石船の苦は片面に4枚の計8枚。1枚の長さは1間(約1.8m)、幅半間(約0.9m)。雨や水を避けるために桐油(油桐の実からしぼった油)紙をひきました。

[注3]

三十石船の場合は曳柱と言っていたらしいです。三十石船が帆を張っていたかどうか、今、調べています。



■三十石船
(資料:財団法人 アダチ伝統木版画技術保存財団)